

ぬいぐるみ、図書館にお泊まり “分身” がつなぐ子どもと本

毎日新聞 2014年01月25日

子どもたちのお気に入りのぬいぐるみを一晩、図書館に預けるアメリカ発のイベントが全国で広がりつつある。「ぬいぐるみが本を選んだりする」様子を図書館職員が写真に撮ってプレゼントする。幼い子にとって友達同然のぬいぐるみが、本に囲まれた「お泊まり会」に参加することで、子どもたちに本を身近に感じてもらうのが狙いだ。【長尾真希子】

■「冒険」の様子写真で

「みんなの大好きなぬいぐるみさんたちは、夜の図書館でどんな冒険を繰り広げるのかな?」。先月下旬、大阪府寝屋川市の市立寝屋川市駅前図書館「キャレル」であった初の「ぬいぐるみの図書館お泊まり会」。参加した15組の親子連れは、図書館職員から問い掛けられると、ワクワクした表情になった。

読み聞かせの後、子どもたちは大事なぬいぐるみを布団に寝かせ、いったん帰宅する。

閉館後、職員たちは、ぬいぐるみを館内のあちこちにセット。子どもたちのために本を探したり、本を消毒する機械を使ったり、受け付け端末を操作したり……。その冒険の様子を職員たちが次々と写真に収めていく。

子どもたちは翌日、ぬいぐるみを迎えに来る。

図書館職員が「梨奈ちゃんと理紗ちゃんが今日、ピアノの発表会だったって聞いたから、2人のぬいぐるみさんがこの本を選んでくれたよ。この本、読んでくれるかな?」と話しかけながら、メッセージ入りの写真と共にお薦めの本を差し出した。本を渡された双子の萩田梨奈・理紗ちゃん(4)＝同市＝は、「この本、今日、借りていくね」とはにかみ、母の千恵さん(41)は「このイベントは、子どもに夢を与えてくれますね」とほほ笑んだ。

また、いつも一緒に寝ているクマのぬいぐるみを預けた同市の松田悠太君(3)は前の晩、「図書館にはお風呂があるのかなあ? みんなで仲良くお風呂に入ってるといいね」と話していたといい、母の奈美さん(37)は、「子どもの想像力を養うきっかけにもなり、一生記憶に残る思い出になった」と満足そうに話した。

■利用減の歯止め

昨年4月に文部科学省が行った「2013年度全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)」の読書・図書館関係集計結果によると、小学生の約3割、中学生の約6割が図書館に「ほとんど、または、全く行かない」と答えており、深刻な図書館離れの実態が浮き彫りとなった。

ぬいぐるみのお泊まり会は米国で誕生し、2010年秋に国立国会図書館のサイトで紹介されたことから、利用者を増やしたい図書館側が取り入れ、全国に広まった。現在までに全国で100以上の図書館が実施したという。

その一つ、寝屋川市中央図書館の尾崎安啓(やすひら)館長(55)は、「図書館を普段利用していない人に図書館の魅力を知ってほしい。子どもが親に『図書館に行きたい』と言ってもらえるようなきっかけ作りとなれば」と話す。

慶応義塾大学文学部の糸賀雅児(いとがまさる)教授(図書館情報学)は「自分の“分身”であるぬいぐるみを介しての本との出会いの演出は、日常的な本の接し方とは違い、新鮮だ。従来の手法にとらわれないこうした企画を仕掛けていけば、子どもの図書館利用減少に歯止めをかける解決の糸口が他にも見えてくるだろう」と話している。